

子育て中の夫の精神援助行動の特性と 夫婦関係満足度の関連

瀧本千紗， 室津史子， 濱耕子

愛媛県立医療技術大学紀要 第16巻 第1号抜粋

2019年12月

子育て中の夫の精神援助行動の特性と 夫婦関係満足度の関連

瀧本 千紗* 室津 史子** 濱 耕子***

The Relation between the Characteristics of the Father's Mental Supporting Behavior and Marital Relationship Satisfaction between Couples

Chisa TAKIMOTO ,Fumiko MUROTSU ,Kouko HAMA

Abstract

The objective of the present study was to investigate the relation between the characteristics of the father's mental supporting behavior and marital relationship satisfaction between couples.

The study recruited 124 couples who were going to have an 18-months child health examination for their first child. We asked mother expectation score and evaluation score of the father's mental supporting behavior. And we asked father for self-evaluation. Explanation of the study and the related questionnaire sheet was mailed by post along with the information about the 18-months child health examination. Completed sheets were collected when they visited the health center, and valid responses from 71 couples were obtained.

Results showed that the father's mental supporting behavior tended to be higher in the order of "expected score by mother", "evaluated score by mother" and "evaluated score by father". However, no significant difference was observed.

Both the father's and mother's marital relationship satisfaction showed positive correlation with the father's mental supporting behavior as evaluated by the mother.

However, the difference between the couple's marital relationship satisfaction scores negatively correlated with father's mental supporting behavior that the mother evaluated.

In the group with a high score of mental supporting behavior that the mother evaluated, the couple's marital relationship satisfaction was significantly higher than in the group with a low score.

We revealed the importance of father's mental supporting behavior in marital relationship satisfaction.

Moreover, we thought that the father's satisfaction that "I was able to support my wife mentally" is related to his marital relationship satisfaction.

Keywords: 夫婦関係満足度, 精神援助行動, 1歳6か月児健康診査, 子育て

序 文

夫婦関係における研究では、育児期の夫婦の関係性の悪化と、その関連要因が明らかになってきている。先行研究では、第1子が生まれた夫婦は、夫婦ともに産後は相手に対する愛情が有意に低下し¹⁾、妻の夫婦関係満足度は夫の夫婦関係満足度より有意に低いことが示されて

いる²⁾。夫への親密性を低下させる要因として、夫の育児参加が少ないことが挙げられており³⁾、Kluwer⁴⁾は子どもが生まれてからの家事や育児分担にまつわる不公平感が結婚の満足度を低下させ、結婚の質を変化させると述べている。日本における研究でも、夫婦関係満足度に影響を及ぼす要因として、夫から妻に対する精神的なサポートの重要性が明らかになり始めているがその研究は

*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科 **広島都市学園大学健康科学部看護学科 ***石川県立看護大学看護学部母性・小児看護学講座

まだ少ない。

日本における育児に関する研究において、藤原ら⁵⁾は、親と子どもの双方にとって、母子関係だけではなく、父子関係の促進は子どもが育っていく上で重要な役割を果たし、家族関係の形成に功を奏する、と指摘している。また、神原⁶⁾は、虐待予備軍である保護者の実態として、虐待の傾向は夫婦関係や子育てに対する夫の協力度、子育て不安との関連が高いと報告しており、育児において父親の存在は極めて重要であることを示しており、夫の育児家事や夫婦関係の良否が子育てと関連していることが明らかになっている。しかし父親の育児に関する量的・質的研究について見てみると、父親がキーワードになっている研究の93%は依然として研究対象者が母親であり、母親を対象に父親の育児を推定することを目的に作成された尺度が使用されていた⁷⁾。父親が育児を行うことの重要性は指摘されているが、父親を対象とした育児に関する研究は量的・質的に不足している現状である。

以上のことから本研究では、夫婦双方を対象とし、夫の精神援助行動の特徴を検討すること、夫の精神援助行動の特性と夫婦関係満足度の関連を検討することを目的とする。夫婦双方を対象とすることで、今まで十分には明らかになっていない、父親の視点からも精神援助行動や夫婦関係について明らかになることが期待できる。

本研究では、父親の育児家事行動のうち、妻の情緒的安定を促す精神的援助を「精神援助行動」、夫婦の絆や関係性における主観的な満足の度合いを「夫婦関係満足度」と定義する。

方 法

1. 調査期間

平成27年7月から11月

2. 対象者

対象者は、A県内の保健センターに第一子の1歳6か月児健康診査のため来所した保護者夫婦124組248人である。第一子のみと第二子がいる家庭では、上の子の世話の有無により夫の育児家事行動にも違いがあると考え、今回は第一子に焦点を当てることとした。1歳6か月という調査時期は、子どもの動きもダイナミックになり始める頃で、親にとっても養育だけでなく、しつけや教育を視野に入れた子どもとのかかわりが求められる時期であり、夫婦で育児を行うことの重要性が増す時期であると考えた。また、夫婦関係満足度は出産2年後で夫婦共に顕著に低下すると言われている³⁾。日本における1歳6か月児健康診査受診率は9割を超えており様々な背景にある夫婦を調査対象にできる。以上のことから第

一子の1歳6か月児健康診査時期を調査時期として設定した。

3. 調査方法

1) 調査用紙

無記名自記式アンケート調査用紙を用い、属性、育児家事行動、夫婦関係満足尺度等を尋ねた。使用したのは次に示す2つである。

日隈ら⁸⁾の育児家事行動は、相手行動、世話行動、精神援助行動、家事行動からなる19項目で構成されており、父親が行う育児を多面的に捉えられる尺度であることに加えて、先行研究^{8),9)}でも多く用いられ、結果を比較検討できることから本研究にて使用した。精神援助行動は、育児家事行動を構成する下位項目の一つで、「育児助言」「夫婦の会話」「悩みの相談」「体調の気遣い」の4項目から成る。評定は1~4点までの4段階で、得点が高いほど精神援助行動を行っていることを示している。本研究では、各々が考える夫の精神援助行動の実際と、夫に対する妻の期待を知るため、妻には自身が評価する夫の精神援助行動（以下「妻の評価」）と夫に期待する精神援助行動（以下「妻の期待」）を、夫には自身が評価する精神援助行動（以下「夫の評価」）を尋ねた。諸井¹⁰⁾の夫婦関係満足尺度は、NortonのQuality Marriage Indexの日本語訳であり、すでに信頼性・妥当性が検証されている（Cronbachの α 係数.927）。6項目から構成され、評定は1~4点までの4段階である。得点が高いほど夫婦関係満足度が高いことを示している。なお、育児家事行動および夫婦関係満足度尺度の使用については各著者から口頭および文書で許諾を得ている。

2) 配布および回収方法

研究の趣旨と方法を保健センターの代表者に文書および口頭で説明し了解を得た。保健センターから来所予定者に向けた1歳6か月児健康診査の案内文書に研究依頼書と調査用紙を保健センターの担当者が同封し、同意が得られる場合は夫婦別に回答済みの調査用紙を厳封し、1歳6か月児健康診査時に提出していただくよう依頼した。提出の意思はあるが持参を忘れた方についてはその場で返信用封筒を渡し、後日郵送による提出を依頼した。

4. 分析方法（図1）

先行研究^{11),12)}において夫婦双方の夫婦関係満足度における夫の精神援助行動の重要性が示唆されていることから、本研究では夫の精神援助行動に焦点を当てて分析・検討を深める（図1）。記述統計を算出の後、夫の精神援助行動得点の「妻の評価」「妻の期待」「夫の評価」の3群比較にはKruskal-Wallis検定とBonferroni法による多重比較検定を行った。夫婦関係満足度を従属変数、夫の精神援助行動を独立変数としてMann-WhitneyのU

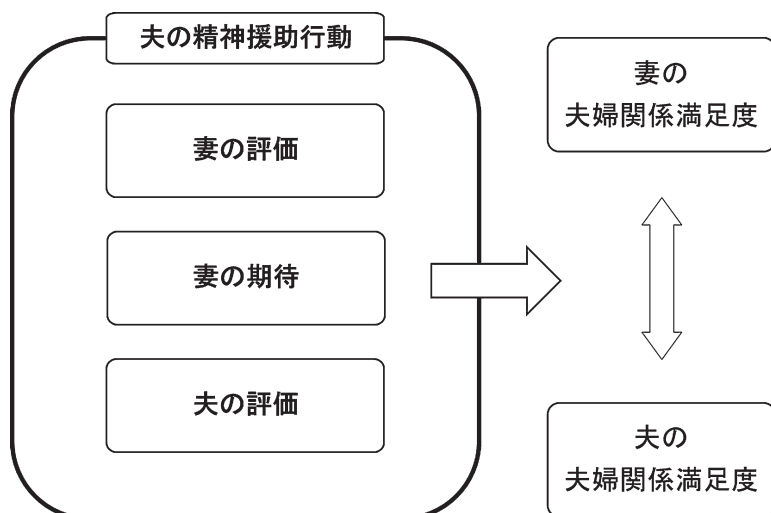


図1 本研究における概念枠組み

検定を行った。夫婦関係満足度やその得点差と夫の精神援助行動間の相関は、Spearmanの順位相関係数を求めた。データの分析は、Windows版統計ソフトIBM SPSS Statistics version 24を使用し、有意水準は.05未満とした。

5. 倫理的配慮

研究者は保健センターの責任者、対象者に対し、研究依頼書を用いて研究目的と方法の説明を行った。対象者宛の依頼文では、研究依頼からアンケート回収までの過程において、調査施設に承諾を得て実施していること、研究自体は調査施設とは関係のないこと、研究に同意した後でも撤回することが可能である旨を明記した。本調査への協力は対象者の自由意思であり、調査用紙の回収をもって同意を得ることの了解を依頼文に明記した。回答の有無により対象者に不利益はなく、個人の特定はしないことを依頼文にて説明した。対象者には、妻と夫の調査内容を一致させて分析するため、調査用紙には夫婦ごとに同じ番号を振ることの了解を得た。調査用紙回収の際は強制力が働かないよう、回収箱を留置し、回答済の調査用紙を忘れた対象者に返信用封筒を配布する目的で、回収場所に張り紙で明示した。また、研究者は対象者が自主的に忘れたと申し出てきた場合にのみ返信用封筒を渡し、研究者から対象者へ調査用紙持参の有無を尋ねることは控えた。個人情報保護のため、調査は無記名で行い、調査用紙はID番号で管理しデータは電子化した。調査用紙および電子化したデータは大学内の鍵のかかる場所に別々に保管し、調査用紙は研究期間終了後シュレッダーで破棄した。本調査について不明な点があった際には問い合わせが行えるように、研究依頼書に研究者の連絡先を明記した。なお、本研究は平成27年度愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻研究倫理審査委

員会の承認を受けて実施した（承認番号：看27-3，平成27年6月22日）。

結 果

1. 配布および回収結果

調査用紙は124組248人の夫婦に配布した。回収数および回収率は夫72人（58.1%）、妻79人（63.7%）であった。分析対象は、夫婦の回答が揃ったものとし、最終的な有効回答は、夫婦71組142人（有効回答率57.3%）であった。

2. 対象者の属性（表1）

家族構成は、核家族が56組（80.0%）であった。

1) 妻の属性

妻の年齢は平均 31.6 ± 5.2 （R20-44）歳であった。就業形態はフルタイムで勤務している人が15人（21.1%）、パートタイムで勤務している人が8人（11.3%）、専業主婦・その他が48人（67.6%）であった。また、就業している人の休日は週 2.2 ± 0.7 日であった。夜勤をしている人はいなかった。また、「最も育児を担当している人は自分（妻）」と答えた妻は69人（97.2%）、「二番目に育児を担当している人は夫」と答えた妻は、50人（72.5%）であった。また、三番目に育児を担当する人としては、義母が21人（33.3%）、夫が14人（22.6%）であった。

2) 夫の属性

夫の年齢は平均 32.7 ± 5.7 （R20-49）歳であった。就業形態はフルタイムまたは自営で勤務している人が62人（88.6%）だった。休日は週 1.5 ± 0.5 日、夜勤をしている人は20人（28.6%）で平均夜勤回数は週 1.7 ± 1.3 回であった。「最も育児を担当している人は妻」と答えた夫は67人（95.7%）、「二番目に育児を担当する人は自分

表 1 対象者の属性

項目		妻 (n=71)	夫 (n=71)
年齢(歳)	[平均±SD]	31.6±5.2	32.7±5.7
家族構成		核家族 56(80.0%) 拡大家族 14(20.0%)	
最も育児を担当している人		自分 69(97.2%) 自分以外 2(2.8%)	妻 67(95.7%) 妻以外 4(4.3%)
二番目に育児を担当している人		夫 50(72.5%) 夫以外 21(27.5%)	自分 48(68.6%) 自分以外 23(31.4%)
三番目に育児を担当している人		実母 21(33.3%) 夫 14(22.6%) それ以外 36(44.1%)	義母 19(30.6%) 自分 14(22.6%) それ以外 38(46.8%)
就業形態		フルタイム 15(21.1%) パートタイム 8(11.3%) 専業主婦・その他 48(67.6%)	フルタイム・自営 62(88.6%) パート・その他 9(11.4%)
夫婦関係満足度得点[平均±SD]		19.5±3.5	20.5±3.1
私たちは、申し分のない結婚生活を送っている。		3.2±0.7	3.3±0.6
私と妻/夫の関係は、ひじょうに安定している。		3.3±0.7	3.4±0.6
私たちの夫婦関係は、強固である。		3.2±0.7	3.4±0.6
妻/夫との関係によって、私は幸福である。		3.4±0.6	3.6±0.6
私は、まるで自分と妻/夫が同じチームの一員のように感じている。		3.0±0.8	3.3±0.8
私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う。		3.4±0.7	3.5±0.6
夫婦関係満足度得点			*
夫の精神援助行動*	[平均±SD]	妻の評価 12.3±2.9	夫の評価 11.7±2.5
育児助言		妻の期待 12.7±3.0 妻の評価 2.7±1.0	夫の評価 2.4±1.0
夫婦の会話		妻の期待 2.7±1.0 妻の評価 3.4±0.7	夫の評価 3.3±0.7
悩みの相談*		妻の期待 3.5±0.8 妻の評価 3.1±1.0	夫の評価 2.9±0.9
体調の気遣い		妻の期待 3.3±1.0 妻の評価 3.1±1.0	夫の評価 3.1±0.7
		妻の期待 3.3±0.9	

Mann-WhitneyのU検定およびKruskal-Wallis検定

*p<.05

(夫)」と答えた夫は48人(68.6%)であった。また、三番目に育児を担当する人としては、義母が19人(30.6%)、自分(夫)が14人(22.6%)であった。

夫婦それぞれが考える、最も育児を担当している人、二番目に育児を担当している人、三番目に育児を担当している人は、 χ^2 検定において夫婦間の有意差は認められなかった。

3. 夫婦関係満足度の特徴

夫婦関係満足度の平均は妻19.5±3.5点、夫20.5±3.1点であり夫婦間に有意差は認められなかった。質問別に見ると、「妻/夫との関係によって、私は幸福である。」において妻の得点が夫の得点より有意に低かった(p<.05)。

4. 夫の精神援助行動の特徴(図2)

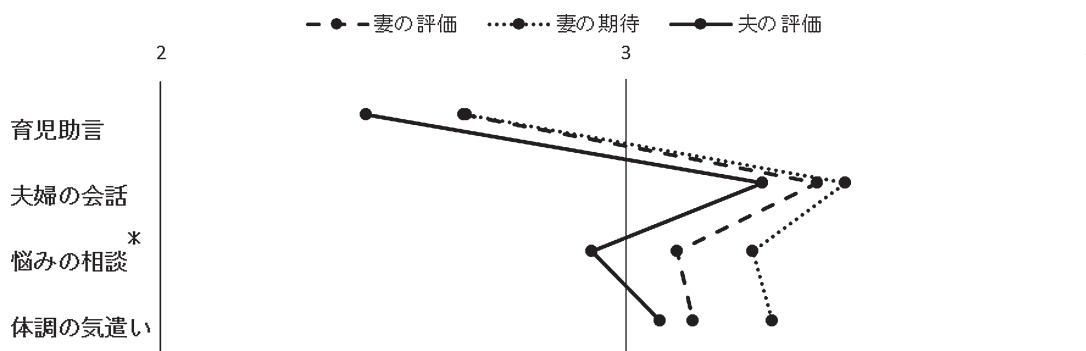
夫の精神援助行動(16点満点)の平均は、妻の評価12.3±2.9点、妻の期待12.7±3.0点、夫の評価11.7±2.5点であった。夫の精神援助行動を「妻の評価」、「妻

の期待」、「夫の評価」の3群に分け、Kruskal-Wallis検定にて比較した結果、夫の精神援助行動(p<.05)とその下位項目である「悩みの相談」(p<.05)、で有意差があった。いずれの項目も「妻の期待」、「妻の評価」、「夫の評価」の順で得点が高い傾向にあったが、Bonferroni法による多重比較検定では有意差は認められなかった(図2)。本研究における夫の精神援助行動のCronbachの α 係数は、「妻の評価」.791、「妻の期待」.806、「夫の評価」.743であった。

5. 夫婦関係満足度と夫の精神援助行動の関連

(表2, 表3)

夫婦それぞれの夫婦関係満足度と夫の精神援助行動の関連を検討するため相関係数を算出した(表2)。次に、夫婦関係に対する夫婦間の認識の違いの程度と夫の精神援助行動の関連をみる目的で、夫婦関係満足度の夫婦間得点差を求め、相関係数を算出した(表2)。また、夫の精神援助行動得点の特徴による夫婦関係満足度の違い



Kruskal-Wallis検定* $p<.05$, Bonferroni法 $n.s.$

図2 夫の精神援助行動（妻の評価, 妻の期待, 夫の評価）

表2 夫の精神援助行動と夫婦関係満足度の得点の相関 $n=63$

項目	妻の夫婦関係満足度得点	夫の夫婦関係満足度得点	夫婦関係満足度の夫婦間得点差
妻の評価	.540 **	.374 **	-.297 *
妻の期待	.241 *	.500	-.142
夫の評価	.382 **	.453 **	-.098

Spearmanの順位相関係数 ** $p<.01$, * $p<.05$

表3 夫の精神援助行動「妻の評価」「妻の期待」「夫の評価」の高低群別、夫婦関係満足度の得点

	高群 (n)	夫婦関係満足度の得点					合計得点	
		私たちは、申し分ない結婚生活を送っている。	私と夫/妻の関係は、ひじょうに安定している。	私たちの夫婦関係は、強固である。	夫/妻との関係によって、私は幸福である。	私は、まるで自分と夫/妻が同じチームの一員のように感じている。		私は、夫婦関係のあらゆるものを思い浮かべると、幸福だと思う。
妻の評価	高群 (n=32)	3.5±0.6 \uparrow **	3.6±0.6 \uparrow **	3.6±0.5 \uparrow **	3.4±0.5 \uparrow *	3.6±0.6 \uparrow **	3.7±0.5 \uparrow **	21.5±2.7 \uparrow **
	低群 (n=31)	2.9±0.6 \downarrow	3.0±0.7 \downarrow	2.9±0.6 \downarrow	3.2±0.6 \downarrow	2.6±0.7 \downarrow	3.0±0.7 \downarrow	17.5±3.1 \downarrow
妻の期待	高群 (n=32)	3.3±0.6	3.3±0.7	3.3±0.5	3.6±0.5 \uparrow **	3.3±0.7 \uparrow *	3.5±0.6 \uparrow **	20.4±2.9
	低群 (n=38)	3.1±0.7	3.2±0.7	3.1±0.7	3.2±0.6 \downarrow	2.9±0.7 \downarrow	3.3±0.6 \downarrow	18.8±3.7
夫の評価	高群 (n=25)	3.4±0.6	3.6±0.5 \uparrow *	3.6±0.6	3.8±0.4	3.5±0.7 \uparrow *	3.6±0.6 \uparrow **	21.4±2.8
	低群 (n=43)	3.3±0.6	3.2±0.6 \downarrow	3.3±0.7	3.5±0.6	3.2±0.8 \downarrow	3.5±0.6 \downarrow	19.9±3.3

表内は平均±SD

Mann-WhitneyのU検定

妻の評価および妻の期待における夫婦関係満足度は妻の回答、夫の評価における夫婦関係満足度は夫の回答である

妻の評価: 12点以下低群, 13点以上高群

妻の期待: 13点以下低群, 14点以上高群

夫の評価: 12点以下低群, 13点以上高群

** $p<.01$, * $p<.05$

をみる目的で、夫の精神援助行動を平均値で高群低群に分けて検討した（表3）。

1) 妻の評価

夫の精神援助行動得点「妻の評価」は夫婦それぞれの夫婦関係満足度と有意な正の相関 ($p<.01$) を、夫婦関係満足度の夫婦間得点差と有意な負の相関 ($p<.05$) を示した（表2）。また、「妻の評価」高群は低群と比較して、妻の夫婦関係満足度合計と下位項目すべてにおいて得点が有意に高かった ($p<.01$, $p<.05$)（表3）。

2) 妻の期待

夫の精神援助行動得点「妻の期待」は妻の夫婦関係満足度とのみ有意な正の相関を示した ($p<.05$)。夫婦関

係満足度の夫婦間得点差とは相関が認められなかった（表2）。また、「妻の期待」高群は低群と比較して、妻の夫婦関係満足度のうち3つの下位項目において得点が有意に高かった ($p<.01$, $p<.05$)（表3）。

3) 夫の評価

夫の精神援助行動得点「夫の評価」は夫婦それぞれの夫婦関係満足度と有意な正の相関を示した ($p<.01$)。夫婦関係満足度の夫婦間得点差とは相関が認められなかった（表2）。また、「夫の評価」高群は低群と比較して、夫の夫婦関係満足度のうち3つの下位項目において得点が有意に高かった ($p<.01$, $p<.05$)（表3）。

考 察

1. 対象者の属性

平成26年の国民生活基礎調査によると、児童のいる世帯の世帯構造において核家族世帯は71.6%であり、本研究の対象は全国と比較し高い核家族率を示している。夫婦それぞれが考える、最も育児を担当している人、二番目に育児を担当している人、三番目に育児を担当している人に夫婦間の有意差は認められなかったことから、育児担当者においては夫婦がほぼ同一の認識のもと育児を行っていることが窺えた。

2. 夫婦関係満足度

本研究における夫婦関係満足度の平均は妻19.5±3.5点、夫20.5±3.1点であり夫婦間に有意差は認められなかった。生後4か月の児を養育する両親を対象とした藤田ら¹³⁾の研究における夫婦関係満足度の平均は妻20.6点、夫21.4点であった。小野寺³⁾は68組の夫婦を対象にした縦断研究において、妊娠7~8か月、出産2年後、出産3年後の夫婦関係について調査を行ったところ、夫婦関係の親密性は出産2年後で夫婦共に顕著に低下することを明らかにしている。本研究の対象は、1歳6か月児を養育する夫婦であったため、藤田ら¹³⁾の対象よりも夫婦関係満足度得点が低くなったと推察する。本研究では夫婦関係満足度の合計点では夫婦間に有意差は認められなかったが、先行研究^{2),9)}同様、妻の夫婦関係満足度は夫より低い傾向にあった。

3. 夫の精神援助行動

夫の精神援助行動を項目別でみると、有意差は認められなかったものの、「育児助言」「夫婦の会話」「悩みの相談」「体調の気遣い」のいずれの項目も夫の自己評価は妻の評価を下回っており、夫は自身の精神援助行動を過小評価している傾向にあることが窺えた。この背景には、自身の行う精神援助行動が、妻が求めるものとなっているのか、迷いながら行っている現状があるのではないかと考える。妻は夫から受ける精神援助行動に対し、態度だけでなく、「ありがとう。」や「こうしてくれると助かる。」といった言葉で反応したり、労いの言葉をかけたりするなど、夫が自身の援助を評価し試行錯誤するために夫婦間の相互コミュニケーションを円滑に行う必要がある。

4. 夫婦関係満足度と夫の精神援助行動の関連

表1および表2より、妻が評価する夫の精神援助行動の得点の低群は、夫婦関係満足度が有意に低く、夫の精神援助行動得点が低いほど夫婦関係満足度は夫婦間で乖離していると言える。この結果より、夫婦関係満足度に

おいて夫の精神援助行動を妻がどのように評価しているかが重要であることが明らかとなった。末盛¹⁴⁾は、夫の家事遂行および情緒的サポートが妻の夫婦関係満足感にどのような影響を与えるのかを分析した結果、夫の家事遂行より情緒的サポートの方が、妻の夫婦関係満足感と関連することを示している。夫は、具体的な育児や家事といった物理的なサポートだけでなく、妻が、夫も子育てに責任を持っていると感じられるよう精神援助行動を充実させていくことが求められている。

また、妻が評価する夫の精神援助行動の得点が高いほど、妻の夫婦関係満足度だけでなく夫の夫婦関係満足度も高くなることから、夫の「妻を精神的に支えたい、サポートしたい。」という思いが行動化されたとき、妻からの何らかの反応を受けることで、夫もそのプロセスの中に満足感を得ているのではないかと推察した。これは、佐藤¹⁵⁾が、「父親が母親の『精神面』を支えることにより、父親自身の『充足感』が高まり、『疲労感』や『不安・焦燥感』が低減する」と報告していることから裏付けられる。

これまで日本では、母親に重点を置いた育児支援が考えられてきた。しかし、最近、この傾向を是正し、夫婦で育児を行えるように支援する必要性が認識され始めている¹⁵⁾。本研究において夫の育児家事行動の中でも精神援助行動は夫婦関係満足度とも関連があることが明らかとなった。夫の精神援助行動を充実させることは育児の充実化だけでなく、夫婦関係を良好化することに繋がり、これは育児不安や産後うつ、虐待などの二次予防にも寄与できるものと考ええる。1999年の厚生省の少子化対策キャンペーンで使われた「育児をしない男を、父とは呼ばない。」という刺激的なキャッチフレーズが注目を集めてから20年が経過した。しかし未だに世間で、「イクメン」や「カジメン」といった言葉が取り上げられ、育児や家事をする男性を特別視する傾向は変わらない。お風呂やおむつ替えといった育児は一般的に育児としてイメージされやすく、短時間で1回が完結するため夫にとって取り組みやすいものかもしれない。しかし、「実際、母親側から見れば父親が子育てをできるとき・したいときだけ行うのでは、子育てにおける労働力として父親をローテーションに組みにくい。」という指摘もあり¹⁶⁾、妻の心理面においても、夫が1回をもって育児と一緒に担っていると捉えることは不満を抱かせていると考えられる。一方で妻の情緒的安定を促すことは短時間では完結せず、夫の継続的な関わりや妻への関心、気づきが求められるものである。そのようなプロセスの中で夫婦関係の綻びが日々修正されながら、良い方向へ向かっていくのではないだろうか。夫は実質的な育児の一部を担うことを通して、育児方針を模索し「父親としての役割行動の具体化」の段階に至るとも言われており¹⁷⁾、実質的

な育児も重要であることは変わらない。しかし看護職者は、夫が実質的な育児の一部を担うことを称賛することに留まらず、夫だからこそできる育児、つまり情緒的安定を促すことの重要性について啓発し、その具体的方法について示していくことが大切である。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は71組であり、十分なサンプル数とは言えない。これは、夫からのデータ収集が容易ではないことに加え、夫婦を一組とした調査研究であることによる。また、今回の調査用紙回収では、夫の回答を妻が夫へ依頼し1歳6か月児健康診査時に回収、持参する方法をとっているため、回収できた夫婦はそのやりとりが可能な、比較的夫婦関係が良好な夫婦であると言える。よって、本調査結果が子育て中の夫婦全体の状態を反映しているとは言い難い。今後は、幅広い夫婦を対象とできるように回収方法を検討するとともに、夫が妻の情緒的安定を促すための具体的な関わりやその効果的な啓発方法についても検討していきたい。

引用文献

- 1) 内田明香, 坪井健人 (2013): 産後クライシス, p. 3-184, ポプラ社
- 2) 堀口美智子 (2000): 「親への移行期」における夫婦関係—妊娠期夫婦と出産後夫婦の夫婦関係満足度の比較を中心に—. 生活社会科学研究, 7, 81-95.
- 3) 小野寺敦子 (2005): 親になることにともなう夫婦関係の変化. 発達心理学研究, 16(1), 15-25.
- 4) Esther S. Kluwer, J.A.M. Heesink, E. van de Vliert (2002): The Division of labor across the transition to parenthood A justice perspective. *Journal of Marriage and Family*, 64, 930-943.
- 5) 藤原千恵子, 日隈ふみ子, 石井京子 (1994): 乳児を持つ父親の養育態度の形成に関する研究. 日本看護学会集録 (小児看護), 25, 129-132.
- 6) 神原文子 (2006): “虐待予備軍”である保護者の実態と子育て支援の課題. 子どもの虐待とネグレクト, 8 (1), 60-71.
- 7) 牧野孝俊, 金泉志保美, 伊豆麻子 (2011): 父親の育児に関する研究動向と今後の課題. 小児保健研究, 70(6), 780-789.
- 8) 日隈ふみ子, 藤原千恵子, 石井京子 (1999): 親としての発達に関する研究—1歳半児をもつ父親の育児家事行動の観点から—. 日本助産学会誌, 12(2), 56-63.
- 9) 橘千恵, 中村絵里子, 中島夕美, 他 (2008): 夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足度との関連—妻との比較—. 母性衛生, 49(1), 65-73.
- 10) 諸井克英 (1996): 家庭内労働の分担における公平性の知覚. 家族心理学研究, 10(1), 15-30.
- 11) 瀧本千紗, 瀧耕子 (2019): 1歳6ヵ月児を養育する父親の育児家事行動の特徴と夫婦関係満足度との関連. 母性衛生, 60(1), 74-82.
- 12) 佐藤憲子 (2010): 父親の育児参加行動と父母の育児意識との関連. 北日本看護学会誌, 13(1), 31-43.
- 13) 藤田優一, 西村朋子, 勝田真由美, 他 (2014): 産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度への影響要因. 第44回 (平成25年度) 日本看護学会論文集 母性看護, 34-37.
- 14) 末盛慶 (1999): 夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足感—妻の性別役割意識による交互作用—. 家族社会学研究, 11, 71-82.
- 15) 佐藤小織 (2012): 初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関心に関する研究—育児初期の核家族に焦点を当てて—. 日本助産学会誌, 26(2), 222-231.
- 16) 宮木由貴子 (19/12/29): 父親の子育てに関する一考察—30代・40代の父親の子育て状況と母親の意識—. <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/note/notes1404.pdf>
- 17) 木越郁恵, 泊祐子 (2006): 周産期における夫の父親役割獲得プロセス. 家族看護学研究, 12(1), 32-38.

要 旨

本研究は夫婦双方を対象とし、夫の精神援助行動の特徴を検討すること、夫の精神援助行動の特性と夫婦関係満足度の関連を検討することを目的としている。第一子の1歳6か月健康診査にて無記名自記式アンケート調査用紙を用いて、属性、夫の育児家事行動、夫婦関係満足尺度を尋ね、夫婦71組から回答を得た(有効回答率57.3%)。本研究は育児家事行動のうち下位項目の「精神援助行動」を分析対象にした。夫婦それぞれの夫婦関係満足度は妻が評価する夫の精神援助行動得点と正の相関を示し、夫婦関係満足度合計の夫婦間得点差は、妻が評価する夫の精神援助行動得点と負の相関を示した。妻が評価する夫の精神援助行動得点の高群は低群と比較して、夫婦関係満足度合計と下位項目すべてにおいて得点がありに高かった。夫婦関係満足度における夫の精神援助行動の重要性が明らかとなった。また、夫の夫婦関係満足度は、妻を精神的に支えることができたという自己評価による満足感が関連していることが示唆された。

謝 辞

本研究にご協力くださいましたお母様方，お父様方，
保健センターの皆様に深く感謝いたします。

(本研究は，愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻修
士課程学位論文を一部加筆修正したものであり，第59回
日本母性衛生学会総会・学術集会にて発表した)

利益相反

本研究は開示すべきCOI状態はない。